



「ケンボー先生と山田先生」BSプレミアムの再放送を見て興味を持ち、番組のプロデューサーが放送後に資料を基にまとめた本を見つけた。下手な小説よりはノンフィクションやドキュメンタリーのほうがよっぽど面白い。昨年を読んだ本の中でイチオシかもしれない。って、年当初に読んだ本はすでに時空の彼方であるからして、どうしても最近に読んだものが印象に残りやすいのではあるが。

「ケンボー先生と山田先生」あだ名みたいなケンボーは見坊というれっきとした名字である。昭和に大評判になった2つの辞書の編者2人の人生とそのいきさつを書いてあるのだが、三浦しをん原作の映画も評判になった「舟を編む」に興味を持った人には絶対に面白いこと間違いなし。

国文学は辛気臭くて好きではなかったが、国語学みたいなもんには興味があって、日本語についての本「超文章法」「日本語練習帳」「文章は接続詞で決まる」、高島俊男の「お言葉ですが」なんて本をよく読んでいた。

しかし、辞書なんて、はっきり言って地味なことこの上なし。どの辞書もたいして違いが無くどれもいっしょ。ただ、わからん言葉があれば調べるだけで、今じゃ、重くてかさばる紙の辞書ではなくネットの辞書で調べるくらいなものである。昨年亡くなった赤瀬川源平の「新解さんの謎」という本がベストセラーになったのは覚えているし、ひょっとしたら読んだかもしれないんだけど、なぜ、あのとき、もっと辞書について興味を持たなかったんだろう。それより以前の「暮らしの手帳」で辞書の評価ランク付が掲載されたときのことなど全く覚えがない。これはひとつの言葉の語釈を、どこの辞書も使いまわしている、おまけにその語釈自体が間違っているという、辞書の赤っ恥を「暮らしの手帳」が暴いたのだ。

辞書の作者といえば、金田一京助しか知らない。誰もがそう思っていたらう。けれど、金田一さんはほとんどは名義だけのものであったそうで、では、辞書はだれが書くのかというと、編者が数人体制で何年もかかって書いて作って改訂する。

例外が三省堂の見坊先生が作った「三省堂国語辞典」と山田先生が作った「新明解国語辞典」である。2つの辞書がその編集理念によりここまで際立った違いがあるとは、目からウロコもええところである。タイムトリップができるならば、発刊されときの世間（といっても辞書界）のざわめきをリアルタイムで経験したかったなあと。

東大の国文学の同級生であり、三省堂出版の同僚であり、共に辞書を作る仕事をしてきた2人が1972年1月9日に決裂。以後、死ぬまで2人が相まみえる（合間見えるは×）ことはなかった。「新解さんの謎」で評判になって、「舟を編む」で脚光を浴び、何十年もしてから改めて名前が知れ渡ることになるうとは夢にも思っていなかったらう。それぞれの辞書が改訂されるごとに用例が変わってゆくのが切なくも可ましい。そして、著者は、決裂した2人が後年、ライバルの相手を思いやっていたのではないかという用例を見つけ出しているのである。辞書には編者の思い入れも出るんやなあと感心するばかりである。

言葉は難しい。わかりやすく短く適格に（これじゃ辞書の語釈の方法だけど）述べるのが至難の業。話し言葉は消えるのが原則なので、著名人でない限りそれほど厳密に注意する必要はないし、普段の会話は相手を傷つけるような言動さえしなければ大丈夫である。対して、メールの普及で聴覚障害者でもリアルタイムで会話できるようになってありがたいが、書き言葉は残るので、書き方には注意することにしたことはない。表情が出ない分、感情に任せて書き連ねると、思いもよらない誤解を招くことにもなる。自戒しなくてはね。

『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』

佐々木健一 文芸春秋